



蜷川さんから得たことを音楽側に取り込んでいきたい。

たので、そこはこだわりました。

N それは新しいですね。僕は『啜う伊右衛門』の京極夏彦さんの原作に水際の何とかが一行ぐらいい書いてあり、それで原作に一行あるから、水際でびしゃびしゃになっている長屋にしましたが、是枝さんは、長屋の坂道を発見して、やったーと思っているのでしょうか。

HK はい。(笑)

N これは俺にしかないと思えることは割りと大事なところですね。

HK 最初のこだわりをどのくらい通せるかというのが結構大事です。色々な制約が出てきてお金がかかります。全部は押し通せないのどどちらかを譲って何かを取らないといけないという選択があり、そこを誤るとたぶん観ている方達が豊かなものを観た気になれないので、そこが難しいです。

YK 蜷川さんと是枝さんはすごい共通点があるなと思います。蜷川さんはその場での即決が早いのだと思います。その中でバランスを取っています。これは絶対どこかでやらなければいけないが、今ではないと思うとか、ここだけは譲れないが他は今回の予算だと妥協しなければいけないという社会的なバランスがあることが分かります。

是枝さんは出し方が温厚ですが、譲らないところは絶対に譲らないところがあるように感じています。

HK 最初に蜷川さんの稽古場を拝見させて頂いた時は演出に悩んでいた時でした。一本映画を撮って、役者をどうやって動かすのか、役者を演出するというのはどういうことなのだろうとか根本的に悩んだことがあり、それで笠松さんをお願いして蜷川さんの稽古を覗かせて頂きました。噂では“灰皿が飛ぶ”と聞いていましたが、非常に穏やかな稽古風景で、逆に役者に対して非常に柔軟な対応をされていました。

コミットメントとディタッチメント

N 笠松さんとはどういうきっかけで知り合われたのですか？

HK もともと僕が『幻の光』の映画を撮った後に、笠松さんからご連絡を頂き、「映画を観て是枝さんのやろうとしている事がよくわかり

ました。あなたの映画には僕の音楽が必要だ。絶対僕の音楽があったらあなたの映画はもっと良くなると思う」とストレートに言われました。**YK** 僕はそれでその映画を観た日に自分が作ったらこうなるというのを作ったのです。それを聞かせたくて、それで一週間後ぐらいに会って聞いてもらいました。

N 是枝さんの画像は少し普通の監督よりカメラは引き気味ですね。『幻の光』でもそうですが、「誰だ、これは」とわからないところがあったりします。ちょっと引き目だという感じがありますが、冷たいというか、寂しいというかディタッチメントな空気で、間に透明な距離感の感じがします。僕はコミットメントばかりです。

笠松さんの音楽も僕から見ると実はそんなにコミットしない。二人は他者に対する距離の取り方が共通しているところがあるかもしれません。

HK 音楽に関して言うと、登場人物の情に乗っかっていくよりも場に響かせたいという意識がすごく強くて。その僕の考えと笠松さんの音楽が映像の中で響く音が近いみたいです。

でも、映像ではそういうディタッチメントな感じというのをどこかで乗り越えなければと思う自分の欠点だと自覚をするように最近はなってきた、やはりきちっと顔なら顔を撮ろう、表情を撮ろうと意識が変わってきました。『花よりもなほ』ではかなり寄ったつもりです。

N 寄った気分はどうでした。

HK 自分では成長だと思っています。

N 自分のそれまで生きてきた、他者に対する接近の仕方や接し方を含めてちょっと変革を起こさないと撮れないでしょう。

HK そうですね。そのディタッチメントというのは僕自身が持っていた演出家になる以前の人との関わり方の距離が、たぶん計算で出ているのではなく出ちゃっているのだと思います。ただそれに気づいた時は結構ショックでした。生身の人に対してどうカメラを向けていくのかというのが、今、自分の中で10年かけて少しずつ自分を変えていっているところだと思います。

N 笠松さんにはそういう意味では、作曲家として聞くべきか、それと

次回作はちゃんと肉体を撮ろうと思っています。



だんだん僕の領域を侵しつつありますね。



手に恵まれなときと大変ですね。

HK それに耐えてもらえる女優さんをどうやって探すかということからスタートしなければいけないので、ちょっと時間がかかるかもしれません。

N 笠松さん、次は何ですか。

YK 3年連続でオペラをして去年で終わり、それは自分でもすごく集大成的な仕事だったので、次に何をやるかということとはとても難しい時期にいますが、やりたいことはあります。『トロイアの女』をオーケストラと朗読と合唱の作品にしたいと思っています。

N だんだん僕の領域を侵しつつありますね。

YK 演劇で蜷川さんとやらせて頂き、得たことはすごく大きくて、それをより音楽側に取り込んでいきたいと思っています。

N こうやって皆さんに聞いていただくとものを作るといってもこんなにも違うということがよくわかると思います。本当に三者三様で、結構面白いなあと僕は思っています。

2006.07.23 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホールにて

も作品としての自分のやりたい方向を聞くべきか、どっちがいいのかな。**YK** どちらも一緒だと思います。音楽は色々な媒体と一緒に出来ませんが、もう一つ、クラシックの作曲家として音楽だけで全てを表現するという事が自分の中心に一番強くあります。

どの分野も自分の道を進むという点では困難があると思います。それはきつと蜷川さんも是枝さんも同じで、それと闘って自分の作りたいものを作るという環境を自分で手に入れなくてはと思っています。

N 僕らの時代はシェイクスピアをやると、目にブルーのシャドーを塗ったりしました。極端に言えば外人に似せるために鼻を付けるとかしたが、そんなことをやっていたって気持ち悪いただけだと思っていました。それからどう脱却していったらいいのかを考えたのです。

YK それは本当に大問題です。西洋音楽は技術的には非常に高いものがあり、それは何かというと教育システムが完璧に出来ているということです。その遺産がすごく大きくて、それは利用したいが、しかしそこで全てが表現出来るかというそれは決してないし、僕は仕事柄外国の人に演奏してもらうこともあります。僕が作ったものは圧倒的に日本的だといわれます。また楽器の起源をよく調べると、ほとんどの西洋の楽器のルーツは西洋ではないのです。それを考えると日本人だから日本の楽器で、と考える必要はないと思っていますが、自分はアジア人で、こういうところで生きているということと、作り出す作品とのすり合わせをどうしたらよいか常に考えます。

N 是枝さんは次の作品はどちらの方向にいくのですか。

HK 今、自分の中ではいくつか構想はありますが……。

N 例えば顔を撮るのか、引き下がって戻るのか。

HK 今度はちゃんと肉体を撮ろうと思っています。身体を撮りたいと思っています。少し上半身から下半身に向かおうと思っています。作品としてはもう少しフィクションというのをやってみたいと思います。

N まったく違う是枝さんに我々は出会うチャンスがあるかもしれないですね。是枝さんの撮る下半身って何だろう。

HK 今までは人の記憶とかをテーマにしてきたんですが、やはり食べるとか、セックスも含めて、肉体というものを描くということをちょっと避けていたというか、まだそこまで辿り着いていなかったところがあって、少しその部分に向けてきちっとカメラを回そうと思っています。

N 面白そうですね。大変そうですね。いい俳優に恵まれ、いい演じ

○ 蜷川幸雄公開対談 ○ 「NINAGAWA 千の目」第5回

写真家 蜷川実花 × 演出家 蜷川幸雄

本年2月から、当財団の芸術監督、蜷川幸雄が毎回、多彩なゲストをお招きして、彩の国さいたま芸術劇場で公開対談をしている「NINAGAWA 千の目」も5回目を迎えます。初めての女性ゲストとなるのは、実の娘でもある写真家の蜷川実花さん。初の長編監督映画「さくらん」の公開を来年に控えた実花さんと、映像作家同士として、あるいは親子として、どんなトークが展開されるか、期待の高まる顔合わせです。

【日時】9月22日(金) 開演 19:00 (約1時間)

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【定員】346名

※メンバーズの方以外の募集期間は終了しています。

進行:佐藤友紀(ライター)

Mika Ninagawa

蜷川実花
1972年東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。「第9回写真3.3m展」グランプリ(96年)、「第13回キヤノン写真新世界」優秀賞(96年)、「第9回コニカ写真奨励賞」(98年)、「第26回木村伊兵衛写真賞」(01年)、「大原美術館賞」(06年)など数々の賞を受賞。主な写真集に「Acid Bloom」(03年)「Liquid Dreams」(03年)「mika」(04年)「floating yesterday」(05年)など。現在は様々なファッション誌や、CDジャケット、広告を中心に、写真集や展覧会での作品発表で活躍中。

